

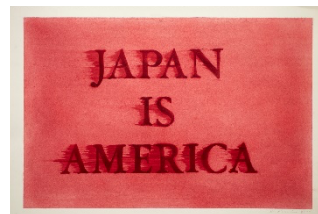
Seven / Seven: The Fraught Landscape

ファーガス・マカフリー 東京

2022年1月22日（土）～3月5日（土）

ファーガス・マカフリー 東京は2022年1月22日より「Seven / Seven: The Fraught Landscape（訳：荒涼とした風景）」展を開催します。

本展はそのコンセプトにおいて、2019年にファーガス・マカフリー NYで開催された『Japan is America』展の続編に位置します。黒澤明監督の日本映画『七人の侍』（1954）と、それに倣い制作された西洋の象徴的映画であるジョン・スタージェス監督『荒野の七人（原題：The Magnificent Seven）』（1960）からタイトルを取る『Seven / Seven』展では、NY展における日本とアメリカの間に見られた芸術的相互関係の探求を引き継ぎ、太平洋を横断する物語性をさらに推し進め、シネマ的なレンズを通して国をまたぐ文化的景観を捉えることに試みます。



主に1985年から2021年に制作された作品が中心となる本展では、良心や自己の主張が東洋と西洋の現代アーティストにとっていかに中心的な関心となっているかを考察します。叙事詩と西洋の型から始まり、静止したイメージから動的な映像へと変換されるプロセスを考察し、これらのジャンルのダイナミズム、ドラマ、そしてそれぞれの性質により成立する作品を展示します。各作家はその技術とビジョンによってそれぞれの叙事詩性を私たちに示しています。



出展作家のうち何人かは自身の作品における日米の歴史的、政治的関係について直接的な言葉を残しています。両国の歴史的、社会的なDNAに組み込まれたこの現代的な枠組みを文脈化するため、数十年に渡る文化圏を超える作品群を展望する本展は、戦後の日本人作家、池田龍雄と中村宏による政治的関心を持つ作品から始まります。池田龍雄《無題》（1957）は、米国による太平洋での核実験と、原爆投下後の日本における急速な産業化に呼応し制作された、腫れ上がり変異した動物と人間が描かれる作品群からの一点です。もう

一方の《玩具世界》（1967）は1966年から70年に制作された同タイトルのシリーズの一つであり、1960年大規模なプロテストにも関わらず締結された日米安全保障条約がもたらす日本社会の変化をシュルレアリスム的に批判しています。中村宏の作品もやはり深く政治性と結びついています。中村は「ルポタージュ絵画」の画家として社会リアリズム的技術を習得しましたが、《水滴》（1974）や《一つ目娘の乱痴気騒ぎ》（1969）は、むしろシュルレアリスム的でポップカルチャーとの関係性を思わせる戦後日本の荒涼とした情景の解釈を見せています。



アメリカ人アーティスト、**エド・ルシャ**のドローイング《Japan is America》(2020)は1980年代半ばに始まったシリーズであり、本展の前編に当たるファーガス・マカフリーNYでの展覧会名もここからとられました。ここでもやはり、マスメディア、肥大化する物質主義、セレブリティブームが現代美術の領域に大きな変化をもたらしていた80年代当時の日米間の社会的状況が回顧的に言及されています。より現在に近い社会的な指摘は**デイヴィッド・ハモンズ**の《Orange is the New Black》(2015)に認めることができます。人気を集めるテレビドラマシリーズから皮肉を込めて名付けられたこの作品は、アフリカの儀式に使われる仮面の形をし、オレンジの塗料が塗られています。この挑発的な彫刻とその題は、アメリカの刑務所に携わる商業的で複雑な状況、そしてアメリカ社会に広がる反黒人差別の主張と切り離すことができない、蔓延した黒人文化の流用について語っているかのようです。

ジャンルを横断するアーティスト、ミュージシャンである**ミルフォード・グレイヴス**は文化圏をまたぐ研究、旅、様々な共同作業を通して長年にわたって作品を生み出してきました。彼は1977年初めて日本を訪れ、長きにわたり日本の重要なダンサー、田中泯ともコラボレーションを重ねました。紙に描かれた《Japan》(2020)は身体、体の運動を感じさせる戦後日本の抽象表現を参照しているようにも見え、遊び心のある音楽性にあふれた人物を正面から捉えているようです。模様が描かれたフロンズと銅の銅鑼《Big Bang》(2020)にはトーンジェネレーターとトランスデューサーが取り付けられています。グレイヴスの身体に対する探求がパーカッションや楽器の振動と人間の心臓鼓動のリズムの関係にシフトされたこの作品には、ギャラリー内の話声や音を受けることでもわずかに反応します。グレイヴスが深い関心を持った自然界のリズムに、日本生まれのアーティストでビデオアートのパイオニアである**久保田成子**の作品はさらなる考察を与えています。彼女の作品はたびたび、仏教的背景、また1960、70年代にニューヨークで起き彼女も運動の中心的存在の1人であったフルクサスとの関係性から生まれています。これらの二つの美学は久保田の代表作品の一つである《ロック・ビデオ 桜》(1986)の中で融合しています。当時最先端の技術を使ったこのビデオ彫刻は自然の詞的な一時的な儚さと、電子的なプロセスを同等に取り扱い、表現しています。



『Seven/Seven』出品作品には映画、特に叙事詩的映画と共通した美学的な関心が読み取れます。**セシリー・ブラウン**の《Strange Magic》(2020-2021)の中では戦後アメリカの抽象表現主義のエネルギーギッシュなストロークと複雑に何層にも重なる物語性が組み合わせられ、錬金術的モーションと動的イメージが生み出すドラマが立ち現れています。**ジョセフ・オリサエメカ・ウィルソン**のミクストメディアの絵画《Another Angry Bull》(2021)は複雑で示唆に富む夢の風景です。そこでは作品タイトルの所以であろう雄牛が、ソーシャルメディア上の投稿や広告、色とりどりのロゴ、三角コーンなど現実と空想の両方の素材で縫い合わされたブロックを着せられています。雄牛の壮大な旅の最中に私たちは引き込まれ、背景に見える高速道路から砂漠にさまよってきたのか、または街の住人がここを通り過ぎ田舎の住居に痕跡を残していったのだろうか、と想像します。一見原始的に見える、浮きと沈みの動き続ける**鴻池朋子**による振り子の作品(2021)は人の頭部の錘(おもり)が電気モーターによって前後に振られ、時間の視覚的標識として機能しています。そのシンプルな構造が露わにされることで、鑑賞者は、その催眠的な動きと動力が宇宙の張力によって制御されているのだということを辿るよう誘われ

ます。叙事詩的映画や西部劇映画に見られる、線状に弧を描くような物語に対し、鴻池の本作品において時間は周期的で、その反復性が見るものの心に強い印象を残しています。

緊張感のある物語を語るアナ・コンウェイの絵画《Mrs. Lance
Cpl. Shane Toole and Mrs. Staff Sgt. Brandon Stevens》

(2007)では、リビングルームで一緒にエクササイズをするアメリカ軍兵士の妻2人が描かれています。映画のワンシーンのような画面の薄暗い照明は、まるで私たちが隠された家庭内の一場面を見ることを許されているかのような印象を与えています。しかし



このようなプライベートな環境の中でさえ、この女性達の身振りはアメリカの軍隊的なものを思い起こさせ、典型的な英雄には肉体的な強さが必要なのだということを再認識させています。1940年代後半から50年代に撮影された植田正治の写真は子供時代のドラマ、感情の不安定さを浮き彫りにしています。《童暦》シリーズからの1作品(シリーズ1955~70。プリント70年代後半~80年代)に写る子供達の行列は丘を登り、《カコ》(1949。プリントc.1990)では黒い服を着た女の子が荒涼とした風景の真ん中に物思いに沈んだように佇んでいます。コンウェイの絵画のように、戦争が人の精神に及ぼす影響は、その最前線に立った人々に限定されることでは決してないことを示しています。展覧会を締めくくるのはリチャード・ノナスによる、数少ないC-プリントにオイルスティックでドローイングされた作品です。ノナスが人類

学者としてフィールドワークを行っていた頃に出会ったのであろう5人の男性が写っており、人と場が会う瞬間に起こる変容と出現を誘発しようとする、この彫刻家の強い関心を思い起こさせます。



『Seven / Seven』展では10名を超えるアーティストによる作品群は、日本とアメリカの社会的、政治的、芸術的環境に関する多様な視点を私たちに提示しています。『Seven / Seven』展は歴史的でありながら現代的、映画的なコンセプトに根ざしながら、今日において重要な日米のアーティスト間に見られる切迫した関係性を明らかにすることを目指します。

出展作家：セシリー・ブラウン、アナ・コンウェイ、フランチェスカ・ガビアンニ、ミルフォード・グレイヴス、デイヴィッド・ハモンズ、池田龍雄、鴻池朋子、久保田成子、中村宏、リチャード・ノナス、エド・ルシャ、植田正治、ジョセフ・オリサエメカ・ウィルソン

ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、白髪一雄、高松次郎など戦後日本美術の国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってきました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。日本の美術や文化と深く沿うため2018年3月、ロバート・ライマン展を皮切りに東京・表参道にスペースを開設。2019~2021年は、マシュー・バーニー、キャロリー・シュニーマン、白髪一雄、ジャスパー・ジョーンズ、リチャード・セラ等を含めた、多様なプログラムを展開しました。

プレスに関するお問い合わせ:

電話: +81 (0)3 6447 2660

メール: tokyo@fergusmccaffrey.com

Images: 1. Ed Ruscha, *Japan Is America*, 2020. Dry pigment and acrylic on paper, 15 1/8 x 22 inches (38.4 x 55.9 cm) © Ed Ruscha; 2. Hiroshi Nakamura, *Cyclope girls orgy*, 1969. Oil on canvas, 28 3/4 x 35 3/4 inches (73 x 90.8 cm) © Hiroshi Nakamura; 3. David Hammons, *Orange is the New Black*, 2015. Wood, metal, natural fibers, acrylic, 24 1/4 x 9 1/2 x 8 inches (61.6 x 24.1 x 20.3 cm) © David Hammons; 4. Cecily Brown, *Strange Magic*, 2020-2021. Oil on linen, 17 x 23 x 1 1/2 inches (43.2 x 58.4 x 3.8 cm) © Cecily Brown; 5. Shoji Ueda, *Mountain Festival from Children in the Year Around series, series 1955-70*, printed late 1970's-80's © Estate of Shoji Ueda; 6. Richard Nonas, *Untitled*, 1983. Oil stick on C-print, 11 x 17 inches (27.9 x 43.2 cm) © Estate of Richard Nonas

来場者様へのお知らせ:

ファーガス・マカフリー 東京では政府のガイドラインに沿った感染防止対策を行います。ご来廊いただく際は、マスクをご着用いただく事、また中にお入りいただく際にアルコールで手指消毒をお願い申し上げます。正面入口にて、スタッフより非接触検温機にて体温測定のご協力をお願いすることと致します。万が一の際連絡を差し上げられるよう、ご連絡先の記入をお願い致します。スペース内の利用に関して、1度にご来場いただける人数を制限させていただきます。最後に、発熱や咳などの症状がある場合はご来廊をご遠慮頂きますようお願い申し上げます。